



Takuya Suzuki



Kazuomi Sakuda



Daisuke Kuroda



Yoshimi Goto



Ryosuke Isogai



Shinichiro Oke



Minoru Tanaka



Hitoshi Nishizawa



Kengo Ohta



Hiroki Sakaji



Ryota Nishimura



Haruo Arakawa



Koki Nakagami



Masayoshi Ito



Zen-ichiro Kimura



Takuji Shintani



Mutsumi Konno



Keita Saito



Tatsuharu Uemura



Masako Ono

技科大の顔

02

2023年 冬号

同窓会と以下の在学生が協力し、制作・配信しています

機械工学系 若葉 慶友
電気・電子情報工学系 内藤 初月
情報・知能工学系 山内 凌人
応用化学・生命工学系 堀木 彩花
建築・都市システム工学系 稲垣 亮



鈴木 拓哉

Takuya Suzuki

2012年 機械工学専攻 修了
戸高義一 研究室

1987年 三重県生まれ
鈴鹿高専 卒業

2018年 高周波熱錬株式会社 入社
同上研究開発本部 材料技術部 配属
現在に至る

私は2012年に機械工学専攻を修了したのち、九州大学大学院博士後期課程に進学しました。博士課程では研究を行いながら外部の学生などの研究の補助を行う研究業務員としても従事していました。博士後期課程は私の力不足により単位取得退学となりましたが、退学後に高周波熱錬株式会社に入社しました。入社後は鉄鋼材料の熱処理に関する研究開発や試験分析業務を担当しています。業務内容は大学での専攻と同じ分野であるため、学生の頃の知識や経験が活かされています。また、高専のインターンシップ生や豊橋技術科学大学からの実務訓練生の対応を行う機会が多く、卒業後も学生の話が聞けて楽しいです。

在学生に向けて、大学では知識や技術を学ぶことはもちろんですが、私が卒業後に感じたのは人とのつながりが重要であるということです。大学の知識がそのまま仕事に活きる場合は少ないと思うので、卒業後に改めて学ぶ機会が多いと思います。一方、研究室のメンバーや先生方、先輩や後輩とのつながりは在学中でしか作れません。そのため、研究室内だけでなく、サークル活動やOB会などでも人脈を広げることは大切であると思います。私は大学を卒業後も材料機能制御研究室のOB会に参加しており、毎年楽しみにしています。

また、大学での就職活動時に企業に所属しているOBの方に連絡することは抵抗があると思いますが、OBの方で後輩に頼られた際に嫌な顔をする人はいないと思うので、積極的に連絡をしてください。

最後に、私が在学中の頃には辛いこともありましたが、先生方のご指導と友人の支えにより大学を卒業することができました。今後もOB会や同窓会には参加したいと思いますので、よろしく願い致します。



黒田 大介

Daisuke Kuroda

2001年 機能材料工学専攻 修了
新家光雄 研究室

1972年 三重県生まれ
鈴鹿高専 卒業

2001年 独立行政法人物質・材料研究機構 入構
2006年 鈴鹿工業高等専門学校 着任
2015年 国立高等専門学校機構本部事務局 転勤
2017年 鈴鹿工業高等専門学校 帰任
現在に至る

大学院で生体用チタン合金の開発に取り組み、修了後は物質・材料研究機構生体材料研究センターで研究員として生体用高素鋼の開発に従事しました。2006年に母校である鈴鹿高専材料工学科の教員に転職し、主に機械材料、材料力学などの専門科目や実験・実習を担当しています。これまでの自身の歩みを振り返ると、技科大での研究や経験と多くのご縁が私を支えていることを実感します。新家光雄先生、小林俊郎先生、梅本 実先生、牧 清二郎先生から大学院時代にご指導いただいた研究スキルは、専門分野以外の研究にもとても役立っています。特に、新家先生には国内外の学会発表、学会活動や多くの先生方との交流の機会を与えていただきました。得意ではない英語での仕事も何とかこなせる度胸、不器用な私を現在でも多方面で助けて下さる人脈を得ることができたのは、新家先生をはじめ多くの先生方の愛あるご指導の賜物です。技科大の先生方の教育者としての姿は、私が教員への転職を意識したきっかけの1つです。研究室で試験片を研磨する学生の姿を見守りながら、当時の先生方と研究活動と一緒に取り組んだ友人に思いをはせてこの原稿を書いています。

前任地での研究のご縁で、現在でも宇宙航空研究開発機構 (JAXA) と共同で宇宙環境中での耐熱合金の耐久性を評価しています。他に、企業と共同で複合材料の高韌性化などにも取り組んでおり、研究室の学生は「材料」、「破壊」、「高機能化」をキーワードとした研究に取り組み、社会に羽ばたいていきます。

学生の皆さんはご自身の健康を第一に、皆さんを支えてくれる方々を大切に、学校生活や研究活動を大いに楽しんで下さい。技科大での経験とご縁は、社会人として歩まれた時にきっと皆さんの一助になることでしょう。



作田 一臣

Kazuomi Sakuda

1999年 生産システム工学専攻 修了
北川孟・三宅哲夫 研究室

1974年 石川県生まれ
石川高専 卒業

1999年 村田機械(株) 入社
工作機械事業部製造部工作課 配属

2002年 同上製造本部発足/工作部管理課 異動

2021年 同上製造本部生産技術部CAMチーム 異動
現在 同上製造本部生産技術部生産技術課 在籍

高専は機械工学科でしたが、ANCの研究で卒業、豊橋技科大では、画像処理の研究で修了と、コンピュータを使った研究に取り組みました。99年は就職氷河期だったこともあり、多くの事業を手掛ける村田機械に就職。技科大へは技術者としての仕事をしたいと進学したはずが、配属先は製造部門で意気消沈しました。しかし、製造部門配属の院大卒は少なく、入社3年目には数億円規模のFMS (Flexible Manufacturing System) の稟議・構築を任せられました。研究内容を直接活かせる業務ではありませんでしたが、研究や論文を書くということが、実は稟議書を書くところに通じていました。この仕組みでは工作機械と自動倉庫を情報系でつなぐ必要がありましたが、研究で勉強したコンピュータやC言語の知識でスムーズに進めることができました。以降、生産管理システムの更新や、加工設備導入では、高専・大学の授業や研究で得た知識、知見が役に立ったと思っています。何より、研究時にわからないことを参考文献から勉強する経験が、社内に先生も実績もない課題の解決につながっていきましました。そうそう、技科大祭の実行委員長もやらせてもらいました。しんどかったですが「自分たちが楽しめれば、まわりも楽しんでもらえる」と決めて取り組めたことが、チームワークにつながったと思っています。自分が楽しめれば、結果はついてきます。そこでの経験が社内プロジェクトを推進するということにもつながっています。学生時代の夢は果たせないこともあります、技科大で打ち込んだことはしっかりと帰ってきます。遊びや趣味も含めて、チャレンジして、楽しんでください。自分の時間を使えるのは今しかありません。



後藤 義美

Yoshimi Goto

1982年 エネルギー工学専攻 修了
本間寛臣 研究室

1953年 宮城県生まれ
一関高専 卒業

1974年 ㈱日立製作所(原子力部門) 入社

1978年 豊橋技術科学大学 編入

1982年 アルプス電気(株)入社

2002年 同上退社(契約社員として在籍)

2014年 同上契約終了 現在に至る

今年古希を迎え、年金生活も10年目に入った私の日常は、余暇をマラソン練習に費やし、ほかに月2回の国際交流会(中身は高齢者の英会話グループ)に参加して楽しんでおります。振り返れば、研究職に就きたいと技科大に一期生として編入学したものの、学業成績はそのレベルにほど遠く、母校の高専でもドクターなしでは厳しいと言われ、残された選択肢は地元近くへの就職でした。幸いにも就職先が大手電子部品メーカーのアルプス電気だったので、研究職の期待もありましたが、結局は車載スイッチ設計、商品企画、電源スイッチ設計とその安全規格管理という職歴となりました。30代には研究職を求めて転職面接など受けジタバタしましたが、その機会は訪れませんでした。退職して62歳の時、会社の先輩が英会話グループに誘ってくれたのをきっかけにネイティブとのコミュニケーションを楽しんでいます。語学力は未だに単語の羅列が多く上達していません(笑)。64歳の時に高専の同窓生がマラソン大会に誘ってくれたのをきっかけにマラソン練習に打ち込むようになりました。当初は息が苦しいだけで何が楽しいのかわかりませんでした。見た目だけではわからない充実感や楽しさがあるのに気付くのに3か月ほどかかりました。語学力同様、マラソンも今でも得意ではありません。60歳以上が100人走ったら80番目くらいです。今思うことは、人それぞれに異なる出会いと機会があり、それを受け入れてこそ今を楽しめる。家康公の名言に「人の一生は重荷を負うて遠き道を行くが如し・・・」とありますが、その人生を楽しめるかは自分の内にあるようです。古希を過ぎれば人生のゴールに近いことを意識しますが、だれでも5秒先はわかりません。今できることに集中して楽しみたいと思います。



磯谷 亮介

Ryosuke Isogai

2015年 電気・電子情報工学専攻 修了
中村雄一 研究室

1989年 愛知県生まれ
私立桜丘高等学校 卒業

2016年 セイコーインスツル株式会社入社研究開発センター 配属

2020年 セイコーホールディングス株式会社(現セイコーグループ株式会社)
研究開発部 配属

2022年 国立研究開発法人情報通信研究機構 研究員 兼務

2022年 セイコーフューチャークリエーション株式会社
技術開発部(研究開発部門 分社化)

現 在 技術開発部及び同機構 研究員

博士後期課程を修了後、腕時計メーカーであるセイコーインスツル株式会社の研究開発部門(現セイコーフューチャークリエーション株式会社)に入社しました。2年ほど時計設計部門にお世話になり、そこで腕時計内部で使われる高効率モータの新製品開発を初めて経験しました。その後はグループの新事業開発業務の一環として、超小型の無線機能付き生体センサの研究開発をしています。システム全体の設計・開発からユースケース探索まで企画全体に携わりながら、複数の研究機関・大学病院との共同研究を通じて、外部からの知見やニーズを取り入れる活動も積極的に行っています。博士号取得後はアカデミックに残らない選択をしたものの、このような形でかかわりがあるのだな、と不思議な気持ちです。最近では、大学で教鞭をとっている研究室の先輩ともコラボを始めるなど、技科大OBとの協業も増えそうです。

また、共同研究先の先生からの紹介で、2年ほど前から情報通信研究機構の研究員を兼務しています。5Gの次の世代の移動体通信に向けた基盤研究に携わり、論文や国際会議、記事執筆なども相まって目がまわりそうではありませんが、毎日新しいことに触れる有意義な日々を過ごしています。これまで多くの機会に恵まれたことに感謝ですが、いずれも人とのつながりがきっかけでした。在校生の皆様も、人とのつながりを大切に、様々な経験をしていってください!



撮影 篠原豪太



田中 実

Minoru Tanaka

2000年 電子・情報工学専攻 修了
太田昭男 研究室

2000年 公益財団法人鉄道総合技術研究所 入所

2000年 同上山梨実験センター 配属

2002年 同上浮上式技術研究室 配属

現 在 同上磁気浮上研究室 室長

大学時代は太田昭男教授の御指導の下、スクリーン印刷法により高温超伝導厚膜を作製し、強力な磁石や急峻なマイクロ波フィルタに応用するための材料研究を行いました。博士後期課程修了後は、JRRの研究所以る鉄道総合技術研究所に就職しました。初めは山梨実験センターに配属されて、リニア車両に搭載される超電導磁石ではなく、対向して地上側に設置される電磁石(地上コイル)の担当となりました。研究室配属後は地上コイルの研究だけではなく、無線センサーの研究、高温超電導磁石の開発、通勤電車の品質管理などを経験させて頂き、大学時代の学業が様々な場面で役立ちました。2020年度より研究室長になりましたが、これからという時に新型コロナウイルス感染症の流行で入社制限がかかり、研究費も削減されて思うように研究できない状況が続きました。しかし、最近はコロナが5類感染症に移行されて通常の研究活動が行えるようになり、久しぶりに国際会議でポルトガルに行ってきました。世界中から集まった研究者がテーブルを囲み意見交換する場に参加して、改めて研究者になって良かったと実感できました。さて、在校生で鉄道業務に興味のある方は是非インターンシップに御参加下さい。土木、機械、電気、情報など様々な分野の研究者が活躍しています。また、鉄道関係の仕事をしている卒業生で技術的な課題がございましたら当研究所に御相談下さい。



桶 真一郎

Shinichiro Oke

2003年 電気・電子工学専攻 修了
榊原建樹・滝川浩史 研究室

1978年 富山県生まれ

石川高専 卒業

2003年 豊橋技術科学大学工学部電気電子工学系 教務職員

2007年 同上助教

2009年 津山工業高等専門学校電子制御工学科 講師

2016年 同上総合理工学科准教授

現 在 同上教授

大学院で修士課程を修了後、豊技大で教員をしながら学位を取得し、助手・助教として働きました。その後、現在の職場である津山高専に移りました。豊技大で研究に打ち込んでいるときはあまり意識をしていませんでしたが、自分の身の振り方を考えたとき、私自身が高専(石川高専)出身であることや、豊技大での学生生活・研究生活を通して高専出身者や高専の先生方と多く触れ合ってきたことで、自らが身を置く場所としての高専の魅力に改めて気が付きました。例えば、15歳で高専に入学してから現在まで、約30年間にわたって私の身の回りには高専生や高専教員ばかりがいることとなります。こうなったのも、全国から高専生の上澄み(これは私の出身高専の先生の言葉)が集まる豊技大に進学したからにはほかなりません。現在は高専の教員として、研究と教育、そして校務に追われる毎日を送っています。豊技大から高専に移ろうとしていたとき、何人かの先生方に「高専は忙しいよ」「研究はできないよ」とアドバイスをいただきました。結果として、間違っははませんでした。しかし、正しくは「大学と同じような研究はできないよ」です。時代は変わっても、まだまだ高専生は優秀です。予算や規模は大学と比べ物にならなくとも、その中でできることを探し、それなりに充実した研究をしているつもりです。移ってから10年以上たつのに関わらず、今でも進学を希望する学生から豊技大出身の教員として話を聞かれることがあります。すでに私が知っている豊技大とは大きく変わっていると思いますが、これからも高専生に選ばれ、高専教員から信頼される大学であり続けてほしいと願っています。



西澤 一

Hitoshi Nishizawa

1983年 電気・電子工学専攻 修了
小崎正光・長尾雅行 研究室

1959年 愛知県生まれ

豊田高専 卒業

1983年 日本ガイシ株式会社 入社

1992年 豊田高専電気工学科
(電気・電子システム工学科)

2023年 国立高専機構(タイ高専) 派遣

現在に至る

豊田高専を定年退職後ご縁があり、この4月からタイ高専(KOSEN-KMITL)で現地の学生と向き合っています。豊技大修了後は自動車の排気ガスセンサーの開発業務を経て、母校の豊田高専で30年間教員をしておりました。その間、学力不振対策、JABEE対応と、時代ごとの課題に取り組んできたつもりですが、終盤には新型コロナ感染拡大による遠隔授業等、新しい取り組みや手法と向き合う機会も増えました。現在も授業準備に追われ、タイでの生活を楽しむには至っていませんが、バンコク中心部を離れると昭和の日本を思い出させる懐かしい雰囲気の街並みもあります。

その中で、高専学生の英語力向上のために同僚の吉岡先生と始めた英語多読は、英語圏での活動経験の少ない者がタイ高専で教えることに躊躇しなくてすんだことも含め、自らにも役立っています。私の場合、視力低下の懸念もあり、始めて5年で読むことから(オーディオブックを聞く)多聴に切り換えています。通勤時間や隙間の時間を使って聴いたオーディオブックはミステリ等のフィクションが中心で、現在はJ. K. Rowlingが別名で書いている私立探偵Cormoran Strikeシリーズ第7巻を楽しんでいます。以前は苦痛だった長距離便での移動も苦にならなくなりました。多読は短期集中には不向きで、真面目に勉強するタイプの人ほど失敗する等、英語力向上策としてはクセが強いのですが、焦らずぼちぼちやれば、日本人の外国語学習で最も不足している流暢性を高める効果を期待できます。

豊技大図書館の3階には榊原先生が設置された英語多読コーナーがありますし、豊橋市中央図書館を始め、三河、遠州の市立図書館にも多読コーナーが設置され、環境が整っていますので、緊急に英語力向上が必要な方以外に、また定年後の趣味としてもおすすめできます。



太田 健吾

Kengo Ohta

2013年 電子・情報工学専攻 修了
中川聖一 研究室

1985年 愛知県生まれ
愛知県立岡崎東高等学校 卒業

2013年 阿南工業高等専門学校 助教

2018年 同上講師

2020年 豊橋技術科学大学 講師(人事交流)

現 在 阿南工業高等専門学校 准教授

私は技科大では珍しい普通高校出身者だが、現在では高専教員として高専生を技科大に送り出す立場となっており、不思議なご縁を感じている。高校生の頃はアニメが好きで、地上波で視聴可能なテレビアニメをほぼすべて視聴しており、アニメに登場するような人工知能の開発者になることを夢見て技科大に進学し、人と声で会話する音声対話システムを扱う研究室で、当時はまだ難しかった話し言葉の音声言語処理に関する研究を行った。なお、研究の傍らではネットサーフィンを楽しむ、ある分野においてその日に話題になったネット記事をほぼすべて読むという活動をしており、人が言葉に対してどう反応するのかという知見は研究にも少しは活かされたかもしれない。タイパの時代である昨今では、対象を愚直にすべて観察するというアプローチは好まれないかもしれないし、ある種の学習量においてChatGPTのようなAIに人間が勝つことは不可能なのだが、若い時期にいくつかの分野において事例をほぼすべて網羅するような事前学習を行っておくことで、社会に出てから新しい分野を学ぶ際に効率よく転移学習を行うことができ、長期的にはむしろ人生のタイパが良くなるのではないかというのが最近の個人的な持論のひとつである。

さて、近年では博士号取得後いわゆるアカデミアに就職する若手人材が以前ほど多くない状況と聞か、企業でも研究に打ち込める選択肢が増えてきた中で、あえて教員になるメリットは何があるかという、学生と接する日々を通じた密なLearning by Teachingが挙げられると考える。特に高専はコンパクトな学校であり、学科のすべての学生と言葉を交わすことも難しくなく、学生から得た学びが研究=人生に繋がる楽しい日々はかけがえのないものである。



西村 良太

Ryota Nishimura

2010年 情報工学専攻 修了
中川聖一 研究室

1982年 三重県生まれ
鈴鹿高専 卒業

2011年 豊橋技術科学大学 研究員

2011年 名古屋大学 技術補佐員

2012年 名古屋工業大学 特任助教

2015年 慶應義塾大学 特任助教

現 在 徳島大学 講師

私は高専から技科大へ編入し、そのまま博士課程修了までの8年間（1年多くかかった）技科大でお世話になりました。その後は、色々な大学を転々とし、現在は四国の徳島大学で講師をしています。徳島大学ではのびのびと活動できており、研究室運営も軌道に乗りつつあります。

色々な大学をまわって思うのは、豊橋技科大の学生はみんなやる気に満ち溢れていて、自分から動ける学生が多いということです。高専出身者が多いことも関係していると思いますが、手を動かしてものを作ったり、プログラミングしたりするのが得意な人が多いです。

最近ではディープラーニングが成功を収めていて、ChatGPTなども登場したことから、AIに色々な仕事が任せられるようになっていわれています。そんな中でも、豊橋技科大の学生であれば、AI自体を作ったり、AIとともにハード面・ソフト面に協業したりしながら、これまでにない速さで世の中の役に立つ仕事を成し遂げていけるのだと思います。

将来に渡って、仕事や生活でうまく渡り歩くためには、大学生時代によく学び、よく遊び、全てのことに全力であたるのが大切だと思います。色々なところで同様のことを言われていると思いますが、本当に重要なことなので書きました。肝に銘じてください。仕事や研究で時間がなかなか取れない中でも、頑張っ遊ぶ時間を作るべきですし、逆もまた然りです。

このように、今後の生活の礎を築く時代を豊橋技科大で過ごされる皆さんには、ぜひ楽しく健康に学び・遊んで頂けることを祈念しております。



坂地 泰紀

Hiroki Sakaji

2012年 電子・情報工学専攻 修了
増山繁 研究室

1984年 和歌山県生まれ
和歌山県立串本高等学校 卒業

2012年 株式会社ドワンゴ 入社

2013年 豊成蹊大学理工学部 助教

2017年 東京大学大学院工学系研究科 助教

2018年 同上特任講師

現 在 北海道大学大学院情報科学研究院 准教授

私は多くの技科大生と異なり、高専ではなく一般的な高校から入学してきた一人である。しかも、高校では英語科だったので、かなりのレアケースだと思う。英語科に進んだ理由も英語が苦手だったからという理由と、串本高校では英語科が大学進学を目指した唯一の学科だったからだった。技科大では、学部3年に各高専から転入してくるが、1年からの入学組とは明らかに知識量が異なり、彼らのレベルの高さに驚かされた記憶がある。また、講義のレベルも彼らに合わせて急激に引き上げられ、付いていくのにやっとだった。そんな私は、学部4年の研究室選びの際に、様々な研究室の説明を聞いて回ったところ、自分でも出来そうだなと思ったのが、増山研の自然言語処理だった。皆様の知っての通り、この自然言語処理という分野は、またたく間に世界でも最も注目される研究分野の一つとなった。ChatGPTに代表される大規模言語モデルは、様々な企業で取り扱われており、現在では自然言語処理を使っていない企業の方が少ないように思う。このような中、ずっと自然言語処理の研究を続けてきた私は、ドワンゴから始まり、成蹊大学、東京大学と雇ってもらえることができ、2023年11月からは北海道大学に異動した。特に、テキストから因果関係抽出技術に関しては、最も得意としている技術であり、他に比べられる人があまりいないことから重宝されている。英語などの言語を苦手とする自分が、言語を対象にした研究をするからこそ、ここまで熱中して研究を続けられ、時代の波に乗れたのだと考えている。この原稿を読んでいている技科大生には、ぜひ自分が熱中できることを探して欲しい。また、自分だけが持つ唯一無二の技術を身に付けて必要とされる人材になっていてもらいたい。



荒川 治夫

Haruo Arakawa

1980年 電気・電子工学専攻 修了
榎本茂正 研究室

1957年 栃木県生まれ
小山高専 卒業

1980年 (株)日立製作所
那珂工場生産技術部 入社

1987年 常陽三協電機(株) 入社

現 在 (株)サンシステム
(常陽三協電機を改称)

私は父が始めた事業を引き継いで茨城県で総勢11名、年間売上1億8千万円の零細企業の社長をしています。事業内容はシーケンス制御盤の設計・製作、電気部品の販売が主です。はっきり言って儲かりません。後継者もいません。右肩下がりです。売上が減少。退職者の補充をしないで（新人を採っても定着しません）規模を小さくしながらなんとかつづけてやっています。私に他人を使いこなす器量があればもっと違う状況になっていたのでしょうか。

私は2年で豊橋を離れ、運良く日立製作所に採用されました。社内結婚で同期の妻と一緒に娘を授かりましたが、妻はがんを患い1989年に亡くなりました。後の祭り。仕事も家庭も八方塞がりだと感じました。

そんな状況から私を救ってくれたのが技科大同期のZ君です。凹んでいた私に新しいパートナーを紹介してくれました。実は彼女は早世した技科大同期のO君の奥様でした。紆余曲折ありましたが彼女は私を受け入れてくれました。

「O君はいい思いをしていたんだなあ」私の実感です。相手に恵まれるとはこういうことなのだと感じました。私は彼女に夢中になりました。割を食ったのが一人娘です。中学生の娘に一人で留守番させて朝帰りということもありました。「私は父に虐待された」と娘が言うのももっともです。異性がらみで道を踏み外した人のことがニュースになりますが「馬鹿な野郎だな」から「俺もそうするか」という感想に変わりました。

本業で仕事で達成感・満足感を得られるのは素晴らしいことです。努力・精進しましょう。そうあるべきだと思います。でも違う喜びもあります。私は幸せを見つけました。彼女のためにまだまだ仕事を頑張りますよ。



中神 光喜

Koki Nakagami

2021年 応用化学・生命工学専攻 修了
齊戸美弘 研究室

1995年 愛知県生まれ
愛知県立時習館高等学校 卒業

2020年 豊橋技術科学大学
応用化学・生命工学系 特任助手

2021年 豊橋技術科学大学
応用化学・生命工学系 助教
現在に至る

私は、愛知県豊橋市に生まれ、豊橋市内の小中高を卒業した後、豊橋技術科学大学の1年次に入学しました。学生だった時には、教員になろうとは微塵も考えていなかったのですが、不思議なご縁を頂戴し、任期付きではありますが、本学の応用化学・生命工学系の助教として採用していただきました。

学生時代を思い返すと、仲の良い友達と旅行に行った思い出もあれば、試験前日の真夜中に解法のわからない問題を前にして、ひたすら頭を捻った記憶もあります。研究室では、装置を前にあれこれ試行錯誤したり、研究室の仲間との議論が白熱したりもしました。友人と苦手の教員の悪口を言ってストレスを解消したときもありました。これらは、どれもかけがえのない思い出です。

博士後期課程修了の時期に教員公募があり、本学の助教として採用していただきました。今度は教員の職に就いたので、自らの研究活動はもちろんのこと、学生の教育研究指導をしなければなりません。担当する学生の振る舞いを見て、学生のときは自分もこんな感じだったのだろうか、先生方にはさぞかしご迷惑をおかけしたのではないかと反省することもしばしばあります。

立場が変わると見える世界が変わる、とは言いますが、同じ大学の同じ建物の中で生活していても、立場が違うだけで、これほど見え方が変わるのだと痛感しました。あのとき、先生が仰っていたことはこういうことだったのかと気付く度に、斜に構えて恩師の言葉を真に受け止めず、聞き流してきた自らの言動に対して、後悔の念に駆られます。学生には同じ過ちをしてほしくないとの思いから、あれこれ言うのですが…恐らく、このような教員が、学生目線から見ると“苦手な教員”に該当するのでしょうか。今後も精進して参ります。



木村 善一郎

Zen-ichiro Kimura

2009年 エコロジー工学専攻 修了
平石明 研究室

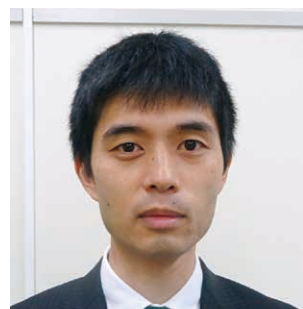
1984年 千葉県生まれ
木更津高専 卒業

2009年 北海道大学大学院工学研究科環境創生工学専攻
2013年 産業技術総合研究所バイオマテリアルセンター ポストドク研究員

2015年 呉工業高等専門学校環境都市工学分野 助教
2019年 同上 准教授

現在 独ハインリッヒハイネ大学
デュッセルドルフ 客員研究員

優秀な同級生たちと異なり高専の劣等生だった筆者は、編入学後の3年1学期は修得単位4単位のみ、座学の必修単位を満遍なく落とすという、留年しがちな学生特有のムーブをしながら過ごした。工学の世界で何者かになりたくて技科大の門を叩いたはずが、自分が目指すべき「何か」がわからなくてひどく悩んだものである。幸運だったのは2学期になり後に師事することとなる平石明教授の、細胞エネルギー工学という代謝を電子の流れの視点で解説する科目を取ったことである。容赦なく単位を落とすことで有名なこの科目が筆者にはひどく刺激的で、夢中で講義を受け「これしかない」と思ったことを思い出す。恐ろしいもので未だに微生物の電子伝達は筆者の主たる研究テーマである。当時これしかないと思ったことが今に繋がっている。4年になり辛うじて研究室への配属条件を満たした後は、平石研で夢中で実験をしながら必修単位を取り直す日々。前号の著者の一人である同級生の鈴木氏を試験当日朝4時にG棟に呼び出し解法を教わったことは今でも忘れ得ぬ記憶である。この場を借りて心からお礼申し上げます。辛うじて学士・修士を技科大で取得した後、現在に至る経緯を述べるには紙面が足りないが、高専教員となって過去を振り返ると、他者から見ると one of them の1科目2単位が学生の一生を左右するような学問との出会いになり得るということを実感する。ゆえに教員とは何とも恐ろしく、しかし楽しい仕事である。師・平石明との出会いが今の筆者を作っているように、自らのミームを受け継いだ学生を育て、技科大へと送って参る所存である。そう、技科大は人生を左右するような良縁の宝庫と信じるからこそである。



伊藤 征由

Masayoshi Ito

2013年 環境・生命工学専攻 修了
竹市力 研究室

1988年 愛知県生まれ
星城高等学校 卒業

2013年 株式会社岐阜セラック製造所 入社
2016年 同上 退社

2017年 国立大学法人豊橋技術科学大学 採用
現在 同上 入試課

学生時代は液晶分子の合成・特性評価を行っていました。研究室では留学生と接する機会が多く、彼らと関わるような仕事がしたいという思いがありました。大学院修了後は企業に就職し塗料の添加剤の開発に携わっていましたが、3年半程勤めた後で思い切って転職し、技科大の事務職員になりました。現在は入試課で働いています。

学生の頃は素晴らしい先生や仲間と囲まれ、とても充実した研究室生活を送っていました。学生にとって大学の研究室とは主に、実験の実施、データ分析、論文調査、先生や先輩とのディスカッション、学会発表や論文投稿といった研究の進め方を学ぶ場所であると思っています。しかしそれだけではなく、社会に必要な基礎を身につける場所でもあると私は考えています。例えば学会発表の練習の際には、相手に伝わりやすいスライドの作り方や話し方を先生からご指導いただきました。また、普段から積極的にコミュニケーションを取ることも大切で、外部とメールのやり取りを行う時の注意点などを学びました。更に、私が学生の頃は研究室の各メンバーに担当業務(有機溶媒の在庫管理、ミーティングの日程調整、飲み会や研究室旅行の企画など)が割り当てられており、皆で協力して研究室の運営を行っていました。以上のことは社会に出てからも必要なことであり、今までの社会人生活に活かされていることも多いと感じています。熱心にご指導いただいた先生や先輩方には心より感謝しております。

学生の皆様におかれましては、先生や友達との関わりを大切に、大学で多くのことを学び、豊かに過ごしていただきたいと思います。



新谷 卓司

Takuji Shintani

1983年 物質工学専攻 修了
伊藤浩一 研究室

1958年 山口県生まれ
宇部高専 卒業

1983年 日東電工株式会社 入社
2016年 同上 早期定年 退職

2016年 神戸大学 特命教授
現在 同上 客員教授

京都大学 特任教授

1979年4月に第二期生として3年次に編入しました。当時の技科大はまだ建設途中で、寮から講義棟・実験棟までは工事現場となっていたことが懐かしいです。1983年3月に修士課程を修了し同年4月日東電工(株)に入社しました。それから約40年間一貫して逆浸透(Reverse Osmosis:RO)膜の研究開発に携わってきました。膜技術は現在では馴染みが多いですが、入社当時はまだ世界的にも手探りの研究開発でした。RO膜の特徴は脱塩であり大きな市場としては海水の淡水化があげられます。世界の人口は約80億人に到達しておりその中で約36億人が安全な水を得ることができない状況です。一方、地球は水の惑星と言われていますが、その97.5%は海水で使用可能な水は全体のわずか0.0075%しかありません。そこで、新たな水源として海水からの淡水化技術が求められました。中東地域では当初蒸発法が用いられていましたが、昨今の温暖化対策として2000年頃よりRO膜法に置き換えられています。写真は1997年に稼働した沖縄北谷海水淡水化センター40,000m³/d規模のRO膜プラントです。2016年に早期退職し神戸大学へ転職し6年間RO膜を中心とした膜技術の研究と学生の指導を行いました。これまでの仕事が少しでも社会に役立っていれば幸いです。

2018年8月に初めて同窓会(還暦)を豊橋で開催しました。非常に懐かしく学生時代に逆戻りしました。後輩の皆さん、かけがえのない友人を大切に、社会へのインパクトを創造しながら研究開発を楽しんでいただければと思います。





今野 睦巳

Mutsumi Konno

2009年 建設工学専攻 修了
松島史朗 研究室

1985年 愛知県生まれ
愛知県立知立東高等学校 卒業

2009年 株式会社オリバー 入社
現 在 同上西日本デザイン部 次長

大学時代に建設工学・松島史朗研究室で、豊川稲荷表参道商店街ファサード改修景観整備に関わらせていただきました。商店街・役所など様々な方が関わる事業で、単に景観を整えるだけではなく、「商店街を活性化するには？」と、学生にも分け隔てなく意見を交わしてくださり、実際に店舗改修まで行うというものでした。松島先生が前職で設計をされており、設計はもちろん、商店街の方々との関係性の構築、交流の中でデザインを進めるプロセスなど、大切なことを教えていただきました。他の学生がなかなか体験できない実務に近い貴重な学びの場で、当時の関係者の皆さま、機会をいただいた大学に、大変感謝しています。

その経験から、より利用者に近い提案をしたいという気持ちが芽生え、建設業界ではなく、造作家具のシェアが高い現在の会社に就職しました。若手の頃から、商業施設やホテル、オフィスと、ジャンルを問わず様々な物件を担当させていただきました。私が入社した頃の愛知県の本社には、女性の総合職は私ひとり。父親のように年の離れた方々と、夜遅くまでデザインに、打ち合わせに、工場検品・現場にと動き回っていました。現在は女性社員がほぼ半数。デジタルテクノロジーの進化など、日々変わっていく仕事にワクワクしています。

内装設計の業務も拡大し、私もまた建築を学び直して一級建築士を取得したり、AIを活用した提案を模索したりと勉強の日々です。大学で得た経験とリンクする部分も多く、学んだことはどこかで繋がるのだと感じています。

後輩のみなさん、大学時代の学びはとても貴重で素晴らしいものです。好奇心旺盛にどんどん吸収してください。私も負けないように頑張ります！



植村 龍治

Tatsuharu Uemura

1995年 建設工学専攻 修了
渡邊昭彦 研究室

1970年 広島県生まれ
石川高専 卒業

1995年 株式会社 日建設計 入社
現 在 同上設計監理部門(監理グループ)

同期の恒川さんからこのお話を頂戴しまして、なぜか追試(流体力学?)の対策を彼の家で行った事を思い出し、堰を切ったように4年間続けた車屋さんでのバイト、バーのマスター、豊川放水路でのうなぎ釣り、コンペ明けに間に合わせるべく郵便局に急いだ事、そして建築に対して一生懸命向き合った事を一気に思い出しました。今考えると高専時代を含め楽しかった学生生活でした。

卒業後、運よく希望した設計事務所に入社することができまして、約10年ほど設計業務に携わり、建築物が世に送り出される楽しみや苦しみを味わってきました。その後、社内制度を利用して監理業務に携わることになり、そのまま残留して今に至っています。恐らく在学生の皆さんにとって、監理業務という言葉は馴染みが薄いかもかもしれませんが、簡単に言いますと設計者がまとめた設計図書通りに建築物が作られているのか、過程も含めて確認する、というものです。この為、基本的には設計業務に携わることが無くなりましたが、一本の線を実際のものにする熱意と努力、そして見る事が難しい裏側に直面する事になりました。決して建築雑誌には出てこない業務ではありますが、建築物を実現させる苦しみの後に訪れる一瞬の喜びの大きさに負けてしまいまして、現在に至っています。

最後になりますが、技科大には雄大な風景と共に様々な可能性に挑戦し夢を現実近づける素晴らしい環境があると信じて疑いません。近い将来、夢を掴み取ろうと社会に出てきた在学生の皆さんと、一緒に歩む未来を楽しみに私はもう少し頑張るつもりです。是非、皆さんも挑戦し続けてみてください、期待しています。



斎藤 慶太

Keita Saito

2008年 建設工学専攻 修了
加藤史郎 研究室

1981年 茨城県生まれ
小山高専 卒業

2006年 株式会社アール・アイ・イー 入社
2023年 豊橋技術科学大学大学院
工学研究科博士後期課程 修了
現 在 同社技術本部 構造技術部 部長

大学院では構造系の研究室で多くの仲間たちと楽しく学ぶことができました。卒業後、単体建物だけではなく、比較的大きい規模の複合的建築物の構造設計の仕事がしたいと思い、再開発に強みをもつ組織系設計事務所に入社しました。就職してからは、希望していた再開発建物をはじめ、学校、美術館、図書館、超高層オフィス・住宅等の幅広い用途のプロジェクトに携わることができています。再開発ビルは単体の用途ではなく、複合的用途の建物が多く、地域や時代の要望により、その用途構成が変わることが多いです。仕事を通じ、建物の骨格が作り出す空間が人々のコミュニケーションにも影響があることも学ぶことができました。技術も常に進歩しているため、アンテナを張り、いろいろな意味での勉強が必要と考え過ごしています。一方、リスキングの重要性が説かれています。6年前に機会があり、技科大の博士後期課程に入学し、昨年博士の学位を取得することができました。学生時代からの疑問、実務で感じた疑問の二つを自分の興味に代えた研究を行うことができました。実務経験を経てからの研究というのは、課題の捉え方等やアプローチ方法も学生時代と異なり、新鮮な気持ちで取り組むことができました。社会人となりまた親となり、時間的に制約はありましたが、良い経験となりました。新たな環境変化に対して、好奇心や興味を失うことなく、自分をモニタリングし、他人に学びを強制されることなく自ら学ぶことが重要なと考えています。今、社会にてカーボンニュートラル、DX、AIについて様々な新しい技術・課題がでており、卒業してからも学ぶことが多くなっていると思います。技科大生には、在学中に『楽しく学ぶ学びの型』を身につけることをお勧めします。



小野 全子

Masako Ono

1984年 建設工学専攻 修了
瀬口哲夫 研究室

1959年 愛知県生まれ
愛知県立時習館高等学校 卒業
1984年 株式会社小野工務店 入社
(現:株式会社オノコム)

1991年 同上設計部 配属
1994年 株式会社オーラッド配属
1998年 同上常務取締役
現在に至る

卒業後父親が建設業を経営していたため、その設計部に所属し、主に枠組壁工法による住宅の設計をしてまいりました。建築の世界では女性建築士が少ないので、より情報交換を行なっていくうえで建築士会に所属することは私にとりましてとても益のあるものでした。初めは、豊橋支部での活動から始まり、愛知建築士の本会での活動、更には、全国組織である日本建築士会連合会女性委員会に所属させていただき、委員長を務めさせていただきました。その折には、魅力ある和の空間を全国より収集し、女性建築士の視点でご紹介いただき、ホームページで閲覧できるようにいたしました。

仕事面では、福祉施設の設計を行なわせていただきました。このぬぐもりの家は、2010年9月にオープンした特別養護老人ホームです。家のように感じいただけるよう内装に木材を採用。構造体も木造枠組壁工法としました。その後この関連した建物として保育施設やデイサービスの設計もお手伝いさせていただきました。住まわれる方に笑顔で楽しく生活していただけるような空間づくりを目指して設計してまいりました。これからの設計に携わる皆様の参考になれば幸いです。



ぬぐもりの家